

大学入試センター試験を歴史化する

文学テキストとして読む英語長文問題

土屋結城・伊澤高志・榎村真由・北和丈・瀧口美佳

1. 序論

日本における「文学と英語教育」をめぐる議論については、2000年代以降、日本英文学会やその関連団体でも頻繁に目にするようになった。簡潔に言えば、伝統的な英文学のテキストが排除される昨今の英語教育界への批判的介入として、文学テキストを英語授業で活用する方法やその意義を論ずる、一種の教材論である。しかしながら、文学研究や批評理論の分野に目を向けると、「作者の死」を宣告したロラン・バルトの名を挙げるまでもなく、1960年代以降は「文学」を特定の作者・作品やジャンルといった名詞的なものに帰するのが難しくなっている。また、ミシェル・フーコー以降の「言説」という概念により、文学研究が歴史学や社会学などと接近し、その領域を広げてきたことも見逃せない。これらの動きを踏まえ、「文学と英語教育」の新たな接点として、文学研究が築き上げてきた「読む」という方法論を活かし、名詞ではなくむしろ動詞、あるいは行為としての文学という考えをもとに英語教育の問題に介入する可能性を考察するのが本発表の目的である。

このような問題意識から具体的な研究対象の可能性を検討し、本発表では2020年をもって廃止される予定の大学入試センター試験（以下、センター試験）を取り上げることにした。改元間もない1990年(平成2年)に始まり、生前退位の議論が世間を賑わす今まさにその役目を終えようとしているセンター試験は、偶然にも平成という時代をほぼすべて目の当たりにしてきたことになる。また、この時代は、学習指導要領の歴史的な大転換で幕を開けた時代でもある。したがって、センター試験の英語を学習指導要領とともに読み解いてみれば、平成という時代の日本の英語教育の姿の一つの歴史として記述できるのではないかと、そしてその「読み」が最も生きるの、一貫してある程度まとまりで英語を提示している第5問と第6問の長文問題ではなからうか。以上の発想から、センター試験の英語長文問題を通時的に読み解くなかでまずは3つの着眼点をあげた。学習指導要領の変遷とセンター試験とのかかわり、「国際理解」と「異文化理解」、そして「コミュニケーション」である。

2. 学習指導要領の変遷と大学入試センター試験

センター試験をテキストとして読むための、いわばサブテキストとして重要なのが、外国語科目に関する学習指導要領とその変遷である。高等学校の学習指導要領は戦後8回の改訂を受け、昭和35年度以降はおよそ10年に一度、告示と新指導要領導入が行われている。センター試験が導入されたのが1990年(平成2年)なので、受験者が高校で教育を受けた時期を考慮すると、センター試験の問題は昭和53年8月告示のものから4つの学習指導要領を元に作られたことになる。

平成元年度告示版の学習指導要領は、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ということを初めて正規の目標として掲げた。1970年代からESLにおいて大きな潮流となっていたコミュニカティブ・アプローチの広がりや背景とし、日本の英語教育がコミュニケーション志向へシフトした画期を示すものであろう。平成10年度告示版になると、「外国語を理解」という文言は消え、「外国語を通じて」、「実践的コミュニケーション能力を養う」という、さらなるコミュニケーション志向の高まりを見せる。現行の平成20年度告示版では、「実践的コミュニケーション能力」を具体的に「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力」としている。このような学習指導要領をめぐる以上の変遷を背景として、センター試験の第5問、第6問について概観してみることにしたい。

センター試験導入当時の作問で参照されていた昭和53年度告示版指導要領によれば、各教科の指導内容の題材は、「その外国語を日常使用している人々をはじめ広く世界の人々の日常生活」などに関するものとされている。この指導要領が反映されていた最後の年である平成8年度までは、平成3年度第6問を除いて、日本人が英語を駆使している様子は描かれない。平成元年度告示版になると、「世界の人々及び日本人の日常生活」その他が題材とされ、「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が目標に掲げられるようになる。この指導要領が反映されている平成9年度から平成17年度までの9年のうち、7年分の第5問は、日本人と英語(母語)話者の会話が題材である。第5問の会話に登場する日本人たちは、平成元年度告示版で推奨される「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする」日本人を読み手に容易に想起させる存在となっている。

また、同じ文脈で「国際理解」「異文化理解」といった言葉もキーワードとして浮上する。というのも、日本人の登場しない英語長文問題を傍観的に読むことと、英語長文問題に登場して英語を駆使する日本人をいわばロールモデルとして見るのでは、想定されている「国際理解」「異文化理解」のありようが異なると考えられるからである。学習指導要領の外国語において「国際理解」という言葉が初めて取り上げられたのは昭和45年度告示

版で、その目標には、「外国語を理解し表現する能力を養い、言語に対する意識を深めるとともに、国際理解の基礎をつちかう」とある。この「国際理解」という文言はその後の平成元年度版では目標の一部に掲げられていたが、平成10年度告示版以降は「言語や文化に対する理解を深め」ることのみが言及され、その重点はむしろ「英語による積極的なコミュニケーションを図る態度の育成」へとシフトしているように思える。

一方で、同じ平成10年度告示版および現行版では、指導計画作成に当たって配慮すべき点の中に初めて「異文化理解」ということばが登場する。現行の平成20年度告示版にもこれが引き継がれていることから窺えるように、「異文化理解」の精神は、英語を学習する過程で身につけるべき重要課題の1つとされている。「国際理解」が消え、「コミュニケーション」に足場が移りつつも、「異文化理解」は重視するという動きであると指摘できる。

3. 「国際理解」と大学入試センター試験

「国際理解」並びに「異文化理解」については、平成2年度から平成8年度までの第6問(物語と評伝)においては、平成3年度第6問及び平成8年度第6問を例外に、舞台はすべてほぼアメリカと推定できる。平成9年度から平成17年度については、第5問と第6問の7割以上で英語圏が舞台とされ、第5問のほとんどは日本人と英語(母語)話者の会話となる。1990年代末から2000年代初頭の英語および国際社会をめぐる言説において、英語圏諸国、とりわけ冷戦終結後の唯一の「超大国」アメリカのプレゼンスがいかに大きいかが示されていると言えよう。同時に、グローバリゼーションとはつまりアメリカナイゼーションのことであり、日本でも批判的に論じられるようになったのもこの時期であるのは興味深い点である。

アメリカナイゼーション批判も登場する時期である平成18年度から平成27年度の間は、日本を舞台としたものが30%とやや増加し、英語圏を舞台にしたものは25%、その他が45%と、比率が大きく変わる。そこで顕著になるのが、いわば「日本のグローバル化」ともいうべきものを描いた内容だが、一方で、平成14年度第5問のイギリス留学中の高校生を最後に、海外での日本人の姿はほとんど登場しなくなり、センター試験で描かれている「異文化コミュニケーション」や「グローバル化」は、日本で、異なる文化的・言語的背景をもつあらゆる人々が、流暢な英語でコミュニケーションを行う、というものがほとんどになる。この不自然さは、もちろんこれが「英語試験」という特殊なテキストであることに由来するが、一方でそれは「国際共通語としての英語」というイデオロギーを体現し、結果として「内向きのグローバル化」状況をテキスト上に構築するものとなる。

具体的に問題を見てみよう。平成15年度第6問では、ブラジルから日本に移住して5年ほど経った少女エレナが、自分はなにひとつ「日本人」と変わらず、「homeは日本」であると述べ、日本に同化しようとしている。しかし、友人からは「彼女は二つの文化をもっている」と言われ、さらに、「彼女は私たちとは違うし、そもそも私たちはみんな違うのだ」という(相対主義的な)正論のために、実は彼女の日本人との「同化」は否定されてしまう。ここに見えるのは、「他者」の同化と差異化の欲望を同時に描きながら、そこになんらの矛盾も文化的摩擦も生じないかのような、いささか楽観的な「グローバル化」幻想である。それから10年ほど経った平成27年度第5問では、「娘のアンナが学校で一人で過ごしていると言っている、友達がいらないのではないか」というアメリカ人の父親のメールに対して、担任の英語教師岡本先生が、アンナの証言は無視し、みんなどうまくやっているという自身の見解を前提とした返事をする。彼の助言は、学校のクラブ活動に入る、家でバーベキューパーティを開きクラスメートを呼ぶ、といった対応をしたらどうかというものである。つまり自身で「受け入れてもらうように努力せよ」ということである。これら2つの物語では、外国人の日本への同化が楽観的に描かれたり、あるいは逆にそれがうまくいかなければ自己責任とされたりする。「他者」を受け入れる日本人側のコストは度外視されており、そこに描かれるのはいわば日本人にとってのユートピア的なグローバル空間である。

一方、平成24年度第5問では、学生二人がカナダ留学の報告をしているが、いずれも「カナダで何を与えてももらえて、何が与えられなかったか」という話に終始し、自ら何をおこなったのかは語られない。そこには、「他者」の文化・社会において、日本人側から乗り越えるべき文化的・言語的な摩擦や衝突はないかのようなのである。先のブラジル出身のエレナやアメリカから来たアンナに対しては「日本」への同化を求めているのに対し、その逆がないことになる。

以上のように読んでみると、センター試験の描く「グローバル化」「異文化理解」「異文化コミュニケーション」といったものの根底には、「他者」を理解し受け入れる姿勢よりも、「他者」に「理解してもらいたい」という欲望があるように思える。

4. 「コミュニケーション」と大学入試センター試験

続いて、しばしばセンター試験の長文問題一特に物語—において理想化されて描かれている、心と心のつながり、具体的には目と目が合う行為によって表されるコミュニケーションを取り上げたい。まず、平成5年度第6

問、家長である父親の立場の変化が食卓の座る位置の変化によって象徴的に描かれている問題を取り上げる。新たに父となった語り手が、自分の父に今までとは違う場所を指して座るように述べた後、父は“**He stopped and looked at me.**”と語り手の「私」に視線を投げかける。そして、父は「私」を見ただけで、「私」の発言の意図、さらにはその発言に込められている「私」の複雑な感情まで理解したと思えるほど従順に従う。そして、息子はこの変化に良い意味が込められていることを“sense”したと述べる。しかし、それは“sense”されるものであり、語り手は父にその思いを言葉に出して伝えることはしない。すなわち、この文章においては、父と息子のつながりは発話された言葉によるものではなく、心と心のつながりとして表され、そのクライマックスに目と目が合い、心が通じ合った瞬間が置かれているのである。そして、そのコミュニケーションは父親の態度に見られるように自己の“best self”を“share”するという1つの理想を提示している。

このような目と目の通じ合いによるコミュニケーション、つまり、言葉に表れない意思の読み取りは読者(受験者)にも求められる。平成7年度第6問、コウモリが住みついた納屋のある家売ろうとする家族の話では、コウモリの話の専門家聞いた後、語り手が“I was silent.”と無言になるが、その設問の間3では、“Why did the author fall silent...?”とまさに silent になった理由が問われる。

サブテキストとして参照している学習指導要領では、平成10年度告示版で外国語の目標に「相手の意向などを理解」することが挙げられているが、それ以前から登場人物の「意向」の理解が求められる問題が出題されていたことになる。センター試験も学習指導要領も同じ目的を共有していたと言えよう。一方、現行の指導要領では、「相手の意向などを理解」という目標はなくなり、センター試験でも平成20年度から問題の形式が変わり、物語は出題されなくなる。この変化からは英語教育の目的が変わったさまを読み取れる。

別の見方をすれば、この問題の変化は必然であるとも言える。コミュニケーションという概念はときに言葉を邪魔者扱いしてしまう。しかし、そうすると外国語教育の存在意義がなくなってしまう。相手の意向を読み取る能力が最大限に発揮されてしまうと、言葉が不要になってしまうのである。これでは、外国語教育は大いなる矛盾を抱えてしまうことになる。

この矛盾は、問題形式の変更によりいったん後景に退くが、平成28年度入試から物語が再び取り上げられるようになる。新たな物語は前述した矛盾にどのように対処しているのか、平成29年度入試で具体的に検討したい。平成29年度入試第5問は、ネコの立場から自分を見る機会を得たユウジという男の子の物語であった。この物語では、まず以前のように言葉にならない部分を問う問題がある。ネコになっていたのが夢だと知ったユウジは、起きてからスマートフォンを手取るが、その際の心情を問う問題、いわば先ほどの例にもあった沈黙部分を問う問題が出題されている。さらに、この物語全体のテーマを問う問題もある。正解は“Observing yourself can lead to self-change.”だが、誤答選択肢の“People using smartphones look strange.”の“Unbelievable things can happen in dreams.”も内容と大幅に異なるわけではなく、それらが正答とならない理由は、予備校の解説によると、「この物語の主題とはいえない」というものである。

平成29年度の物語を分析してみても言えることは、確かに以前と同様の「意向」を問う問題もあるが、以前とは違う傾向の問題も出題されており、特に全体のテーマを問う問題は、英語力を問うというより、道徳の問題になっているのではないかということである。問いまで含めると、この物語は全体として国語教育においてつとに指摘されている、道徳教育化が垣間見える問題になっていると結論づけることができるだろう。

5. 結語

本発表はより大きな成果に向けての中間報告のような意味合いがあるが、3つの異なる着眼点から別個に照らしてもなお、「異文化理解」や「コミュニケーション」といったキーワードに象徴されるような、複数の光が収斂する部分があることは指摘できよう。

参考文献

『2015年版センター赤本シリーズ1 センター試験過去問研究 英語』教学社、2014年。
学習指導要領データベース作成委員会『学習指導要領データベース』、2014年12月26日、

<https://www.nier.go.jp/guideline/>

東進ドットコム「大学入試センター試験 解答速報2017」、<http://www.toshin.com/center/>

独立行政法人大学入試センター「過去3年間分の試験問題」、<http://www.dnc.ac.jp/data/kakomondai.html>